

大いなる茶番

先日（6月2日）の菅内閣不信任を巡る騒動は、茶番としかいいようがありません。見たくもない、下手な芝居を見せられたような後味の悪さ、もっといえば不快感を禁じ得ません。

テレビで、被災地の方々の感想が流されていましたが、いずれも冷ややかな反応に見え、物静かなだけにかえって怒りが深いのではないかと感じています。そして、そう感じる最大の理由は、与野党の中にある菅総理の退陣を求める勢力も、また、それに対抗する勢力も、共に東日本大震災への対応を問題にしていますが、双方の陣営からは本気度が伝わってこないからだと思います。いい過ぎかも知れませんが、あえて申し上げれば、未曾有の大災害を政局にして弄んだのではないかとということです。

菅総理の退陣を求めている方々は、あたかも菅総理が辞めさえすれば物事が動くかのように主張しますが、そんなことがあり得るのでしょうか。菅総理が辞めた後の道筋が何ら具体的に示されない中で、私たち、特に被災者の方々はどこに希望を持つのでしょうか。

一方、菅総理は、大震災への対応に一定のメドがついた段階で退陣するとの意志を表明されました。それは、災害対策に、退路を断って背水の陣で望むという強い意志の表れと受け止めるべきでしょうか。私には、不信任案を否決させるための方便だったとしか思えません。つまりは、これも問題先送りというわけです。それが証拠に、不信任案が否決された直後から、菅総理の退任の時期を巡って対立が起きているではありませんか。

また、与党の中で菅総理の退陣を求めてきた方々も、信念に基づく行動だったのかどうかも疑わしいと思っています。何故なら、鳩山前総理と菅総理との会談で交わされた覚え書きの中には、退任の「た」の字も書かれていません。誠に曖昧なもので、その覚え書きで退任を約束したとかしないとかいい合うことは、誠に不可思議なことです。したり顔に、それは「あうんの呼吸」とか「政治判断」だという人が出てきそうですが、大震災から3ヵ月が経過した状況の中で、そんな訳のわからないコップの中の争いをしている閑はない筈です。

私は、塾頭通信で政治的な問題に触れるつもりはなかったのですが、今回だけはあえて書くことにしました。それは、今日の政治家の皆さんの行動は、子どもたちの範にするには、余りにていたらくだと思ふからです。

選良たる政治家の皆さんには、日本の子どもたちに、責任ある大人の姿を是非見せていただきたい、このことをひたすら切望しています。（塾頭 吉田 洋一）